



UNIRITA

Magazine

12
2016

ユニリタマガジン

特集

見どころ満載

第34回 UNIRITA ユーザシンポジウム

業務課題解決ソリューション 課題編

基幹システムの再構築にあたり、
陥りやすい「落とし穴」を回避する方法とは？

ユニリタの新ビジネスコラム ～攻めのIT 実践編～

業務システムもクラウド時代に突入

～基幹システムで培った情報システムの技術
+ 新しい技術でビジネススピードへ追従～

製品&サービス

セルフサービス化でITサービスの効率化を促進
～ユーザ・サービスデスク担当者の良好な関係を構築～

特設サイト更新情報

IT部門の変革をリードする特設サイト「it's YOUR turn!」
コラム第3弾掲載開始!今ならホラン千秋 壁紙プレゼント!

システム管理者の会

賛同企業インタビュー
～国際IT資産管理者協会 様～

パートナー様ご紹介

日本ティーマックスソフト株式会社 様

ユニリタ
イメージキャラクター
ホラン千秋



第34回 UNIRITA ユーザシンポジウム

見どころ満載 特集Part1

開催まで

あと **03** か月

UNIRITA ユーザ会は、さまざまな業種、さまざまなIT環境のメンバが集まる人脈形成の場であり、1年を通じた研究会活動による技術力向上をテーマに活動を行っています。

ユーザ会活動の1年間の総決算として、毎年3月に行われる『UNIRITA ユーザシンポジウム』ですが、今年は、装いも新たに福岡県博多(ヒルトン福岡シーホーク)に会場を移し開催します。

今回より3号に渡りシンポジウムの見どころや会場周辺のおすすめスポットなどを紹介します。ユーザ会非会員の方も参加可能ですので、ぜひ参加を検討ください。

お申込みはこちら

第34回 UNIRITA ユーザシンポジウム

検索

Why 福岡?

平成17年から12年にわたり、滋賀県大津にて開催してきた『UNIRITA ユーザシンポジウム』ですが、先般の、熊本県・大分県を中心とした地震災害が九州地方へ与えた影響を考え、UNIRITA ユーザ会としても、復興に寄与したいという想いを込めて、九州の地での開催を決定しました。

今回は、九州のIT企業を誘致し展示ブースへ出展いただくことを検討しています。参加者の皆様が相互交流を図っていただき、新しいビジネスの創出を促進できるよう企画中ですのでご期待ください。

UNIRITA ユーザシンポジウムの見どころ

今回も研究グループの成果発表をはじめ、最先端ITの活用事例発表や講演会などのセッションと、パートナー企業様による展示やデモンストラーションを行うパートナーズゾーンなど、見どころ満載でお届けします。1日目のセッション終了後には、参加者の皆様が親睦を深めていただけような情報交換会、2日目の終了時には開催期間を通じ発表された研究グループや事例に対する表彰式も実施します。

講演会では十勝バス株式会社 代表取締役社長 野村文吾氏、管理層向けのマネジメントセッションでは国際IT資産管理者協会 日本支部長 武内 烈氏にご講演いただきます。また、最終日には懇親会※として、福岡雷山ゴルフ倶楽部にてゴルフコンペ(16時解散)や、名勝やグルメが楽しめる観光ツアーも企画しています。こちらも参加ください。

※懇親会は希望者のみ、有料になります

交通機関に関する情報

福岡への移動手段ですが、新幹線、航空機の利用を検討されている方が多いと思います。費用が掛かると思われがち航空券ですが、LCCや早期割引サービスなどを利用することで新幹線の運賃より安価にお求めいただけます。

例えば、羽田～福岡間であればスカイマーク SKY003便(7:40発9:45着)の最安値(11月11日現在)は8,290円となっています。航空各社のWebサイトから確認可能ですので検討ください。

また、福岡空港からは地下鉄空港線 唐人町駅より会場であるヒルトン福岡シーホークまでのシャトルバスが10分間隔で運行しています。こちらの所要時間は約5分となっています。

唐人町駅までは福岡空港駅から23分、博多駅から11分ですので、到着時間の目安としてお考えください。

12時前後に会場に到着可能な運航スケジュール

航空会社	便名	羽田発	福岡着
スカイマーク	SKY003	7:40	9:45
日本航空	JAL307	8:15	10:10
全日空	ANA241772	8:20	10:15
全日空	ANA243789	9:00	11:00
スカイマーク	SKY007	9:20	11:20

航空会社	便名	成田発	福岡着
JETSTAR	GK505	8:05	10:15
Peach	MM523	9:20	11:35

新幹線	のぞみ1号	6:00 (東京発)	10:53 (博多着)
-----	-------	------------	-------------

福岡お勧めスポット

UNIRITA ユーザシンポジウムの見どころはイベントプログラムだけではありません。せっかく福岡までお越しいただくのですから、福岡の名所や名物を求めて少し足をのばしてみたいはいかがでしょうか。ユニリタの福岡事業所や福岡通(自称)の社員から集めたお勧めスポットを紹介していきます。今回はイベント終了後に足を運びたい観光スポットを紹介します。

太宰府天満宮

学問の神、菅原道真を祀る多くの方が訪れる観光スポットです。3月上旬は梅の開花時期ですので梅の名所としても有名な太宰府天満宮に立ち寄ってみてはいかがでしょうか。クッキングパパにも登場する「梅ヶ枝餅」もぜひお召し上がりください。



櫛田神社

博多三大祭の一つ、博多祇園山笠のメインとなる櫛田神社。境内には銀杏の木があり、夫婦円満のご利益があるといわれているので、たくさんのカップルが参拝します。通常、山笠の期間中しか見られない縁起物の「飾り山」が展示されています。



福岡城

黒田官兵衛ゆかりの地としても知られる福岡城。重要文化財に指定されている多聞櫓のほか、祈念櫓や名島門などの遺構が残っており、当時の様子をうかがうことができます。CGなどを用いたバーチャルツアーもあります。



基幹システムの再構築にあたり、陥りやすい「落とし穴」を回避する方法とは？

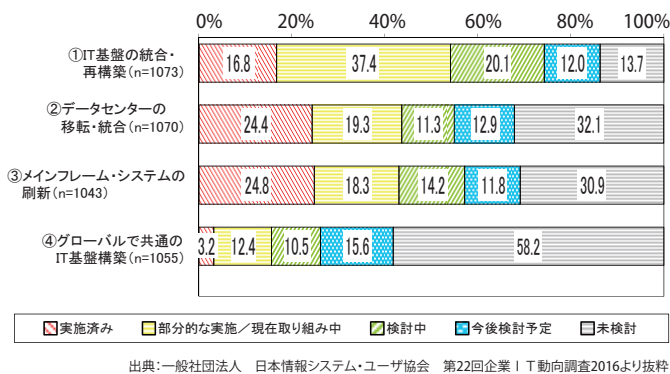


近頃、基幹システムの再構築、統合などの取り組みが盛んになっています。しかし、再構築にあたってERPの採用を検討する際、検討の手戻りや費用増大などの失敗につながる「落とし穴」があります。本稿では、ユニリタの経験に基づいた「落とし穴」を避けるための方法を解説します。

IT基盤の統合・再構築が盛んに行われる背景とERP採用に潜む「落とし穴」

円高の進行や国内消費の不振、新興国の景気悪化などにより、市場環境の不透明さが増す一方、厳しい競争に打ち勝つため、攻めのITへの投資は増えています。中でも変化が激しい外部環境に対して迅速に対応できる経営プラットフォームを構築したいという戦略的な理由で、IT基盤の統合・再構築が盛んにおこなわれています。

図 IT基盤の取り組み状況



実際、上図に示されるように、国内企業におけるIT基盤への取り組み状況は、「統合・再構築」、「移転・統合」に関する項目の検討が特に進んでいます。

再構築の中でも最もインパクトの大きい基幹システム再構築の選択肢としては、再構築までの期間短縮、費用削減、機能充実などから、個別開発よりも汎用性のあるERPが選択されるケースが増えています。また、提供形態においても、カットオーバーまでの期間の更なる短縮とシンプルな構成からクラウドサービスの利用も新たに有力な選択肢となってきています。しかし、このような狙いでERP化のメリットを享受する前に、「落とし穴」に陥り、再構築計画を大きく遅らせてしまうことが多々あります。

今回は「課題編」「解決編」と2回にわたり、情報を提供させていただきます。今回の「課題編」では、実際の事例から、課題を抽出して説明します。

課題の洗い出し ～企業事例A社の場合～

【背景】

A社は30年にわたりメインフレームで基幹システムを稼働していましたが、グローバル化、老朽化対応の一環として、ERPの採用を決定。その際の基本方針は以下の通りでした。

- ERPパッケージの仕様に業務を合わせていく
- カットオーバーまではベンダ側、カットオーバー後は自社でメンテナンスする
- 細かな運用方針は開発後の検討課題とする
- システム間連携およびデータ移行は、ERPベンダが用意する連携ツールを採用する
- 業務レポートはBIツールに統合しペーパーレス化する

【ERP採用決定後、課題が次々と明らかに】

ERPの選定が終わり、プロジェクトが本格化したA社。しかし、その後の要件定義の段階でさまざまな課題に直面しました。

- ERPは、短期構築と柔軟な利用が可能なAWS上で運用することが決定した。しかし、情報システム部員にはクラウドサーバを運用した経験がなかったため、想定外の習熟期間と追加コストが発生してしまった
- 要件定義を行った際、取引先との仕組みに独自の要件がある事がわかった。その結果、ERP側の仕様に合わせられない個所が多数発生し、アドオンとして対応することになった。個社対応の連携要件が膨れ上がり、想定外のコストが発生したため、自社のメンバが対応に迫られる事になった
- ERPベンダが選定した連携ツールもプログラム要素が強い製品であったため、自社では使いこなせなかった
- 業務で利用するレポートはBIに統合しペーパーレス化する方針であったが、社外向けの一部帳票については、従来通りお客様指定のレイアウト、かつ、紙での運用が求められた

既存の基幹システムをスクラッチ型で構築していた企業がERPを採用すると、今回の事例で紹介したA社のように、以下の理由で「落とし穴」にはまってしまうケースが多くあります。

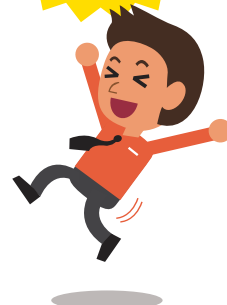
- ユーザ部門のこれまでの要件と汎用パッケージでできることとの差異(GAP)を埋められなかった
- 自社の充当できるリソースが把握できておらず、妥当な方式選択、工期設計ができていなかった

GAPが埋められなかった

- ・クラウドの運用課題
- ・データ移行、連携課題
- ・ペーパーレス化できない帳票の課題



FITした!



A社のプロジェクト担当者は、上記のような課題が発覚する前に、どのような備えをするべきだったのでしょうか。また、課題が発覚してしまった時点で、どのような対策を打つべきなのでしょうか。

次号(1月号)はこれらの要素を含めた課題解決案を紹介します。

担当者紹介



プロダクト事業本部
カスタマーサービス部
第2グループ
佐々木 勉

業務システムもクラウド時代へ突入

～基幹システムで培った情報システムの技術

+ 新しい技術でビジネススピードへ追従～



「攻めのIT編」として初掲載させていただきました2015年10月号から約1年が経過しました。この1年の間に多くの企業で経営方針によるITの見直し、基幹システムの刷新といった動きが活発になっています。皆さまがお勤めの企業でも、企画や検討が始まっているのではないのでしょうか。

ITの見直しや基幹システムの刷新が行われる背景として、「ビジネススピードへ現状のシステムが追い付いていない」という大きな問題が存在しています。「攻めのIT編」として4回目となる今回は、システム運用の視点から新しいIT化の動きへと追従していくための考え方を実践編として紹介します。

担当者
紹介



結城 淳

プロダクト事業本部
特命担当

エンタープライズにおける
積極的なオープンソースの
活用を支援いたします。

基幹システムの刷新が増加中

現在、エンタープライズ企業の多くで基幹システムの見直しや具体的な刷新が進んでいます。1990年代にメインフレームからサーバへとダウンサイジングされた基幹システムはプラットフォームが変化しただけでした。また、その後2000年を境に一気に加速した基幹システムのオープン化もWebによってインターフェイスが大きく変化しましたが、ビジネスロジックの変化へと追従するものではなかったようです。つまり、大袈裟な言い方をすれば、今まで刷新してきたシステムの多くがプラットフォームや操作性などの変化のみで、ビジネスの変化に対応したものではなかったようです。

あるお客様では、「システムが対応できないから現場のビジネスが停滞している」という事象の解決を今年度以降の最優先課題にするとも言われていました。

パブリッククラウドの採用も増加中

古くからSAPを利用しているお客様が、来年度に稼働環境のみをデータセンタからAWSへ変更されるそうです。変更の理由を聞いてみると、「今のデータセンタでは、安心安定以上のメリットを得られない」とのことでした。例えば、新しい事へと取り組む際、一時的に必要なCPU能力のスケールアップ・ダウンだけでも時間と費用が掛かり過ぎるとのことでした。単なる維持だけでは安心安定のデータセンタでの運用が適していますが、今後のビジネスを見据えて、アジリティが高く、ローコストロリスクで取り組めることを重要視するという変化が起きているようです。

AWSなどのパブリッククラウドの採用は、既に日本市場においてもキャズムを超えた利用状況です。対して、エンタープライズ企業の情報システム部門が関わったクラウド利用、つまり基幹システムや業務システムでのAWS利用は少ない状況でした。

ところが、近頃この状況が変化してきており、今年度に入ってから前述したような事例を含め、多くの企業が業務システムやERPシステムの稼働プラットフォームとしてクラウド利用を始めています。(図1参照)

情報システム部門が乗り越えるべき課題

基幹システムや業務システムの刷新、新たに採用されるパブリッククラウド、どちらにも共通するのが「変化への強さや柔軟性」です。グローバル化、為替、爆買など、ビジネスの現場は今までも急激な変化へと対応してきました。今度はシステムがビジネススピードや変化へと追従することで更なるビジネスの拡大を実現しようとしているのが現在の「変化」です。この「変化」へ情報システム部門はどのように対応していくのでしょうか？

情報システム部門には長年培った基幹システムに関する安心安定の運用ルールが存在します。5年も10年も大きく変化することなく、長く稼働し続けることを前提に設計された絶対条件の運用ルールです。基本的に、このルールの範囲内においてのみ情報システム部門は新しいことを受け入れてきました。止まることの許されないクリティカルなシステムを維持管理していくために作られたルールですから、「試しに」とか「少しだけ」といった要件には適さないルールです。しかし、現在、ビジネスの現場はこの要件を求めることが多くなってきています。

図 1. エンタープライズ企業のパブリッククラウド利用状況

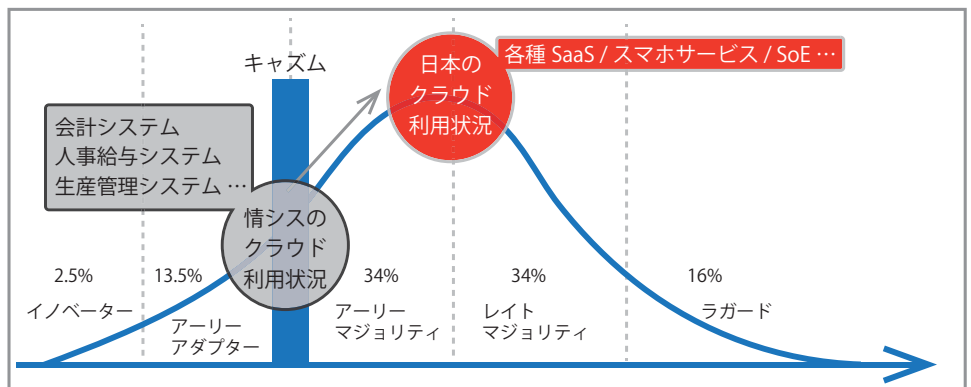
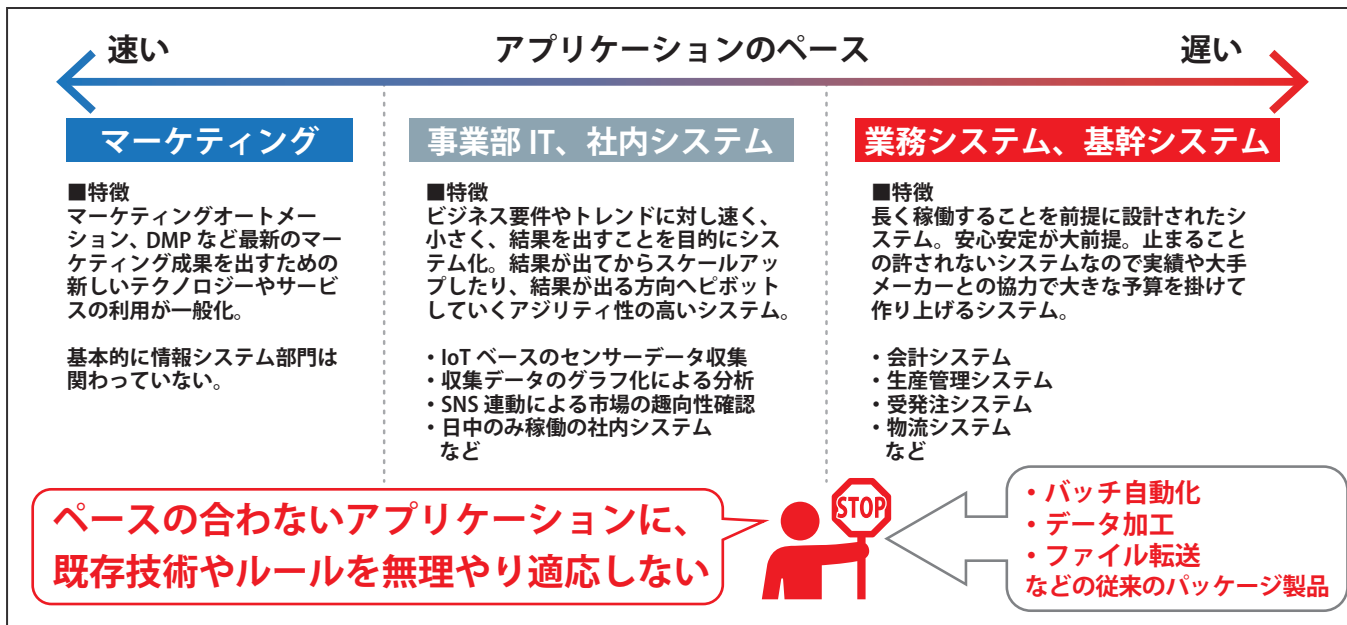


図2. アプリケーションのペースレイヤリング



少し新しい技術の活用と既存ルールで速いペースのシステムへ対応

例えば、IoT技術を活用してセンサーデータを複数箇所から収集し、クラウドの複数インスタンスでデータ取得。次にデータに対する簡易的な加工処理を1日数回バッチで実行し、バッチ実行のアウトプットをOSSツールにインプットしてグラフ化します。将来的にはセンサーデータから不具合を事前把握し、CRMの顧客管理システムと連動したサービスの発展などへと取り組むとします。これらのシステムは、今の技術であれば簡単に作れます。このシステムの成果を最も活用したいのはビジネスの現場です。例えば、部品の劣化状況や過去データからの統計により、部品交換が必要なアラートを自動であげること現場がいち早く対応するなどです。

このような新しい取り組みに対し、情報システム部門が昔ながらのルールやノウハウで維持管理するとどうなるでしょうか。バッチの自動化にはジョブ管理ツールが必要、データ加工もライセンスの追加が必要です。小さく試しながら技術的に結果が出ることを検証して進めたいが、大きな予算の話や調達期間の話になってしまい、本来の目的まで進むことなく頓挫してしまうのではないのでしょうか。または、このような事態を想定して、事業部門から相談されない情報システム部門になってしまっているケースもあるようです。

図2のように、ペースの合わないシステムへ基幹システムで培った既存のルールを適応するのは厳しいと言えます。少し前までは、情報システム部門が長年のルールで培った運用ルールが絶対条件であり、このルールに適應できるものだけが情報システム部門の管理対象システムでした。この考え方はアプリケーションのペースが遅い基幹業務には最適なのですが、少しペースが速くなったとたんに合わなくなります。ペースの速いアプリケーションには「スモールスタート」、「ローコスト」、「ローリスク」、「短期」に取り組んで結果を出すことが求められています。この目的に今までのルールが合わないのは仕方のないことです。

少し新しい技術を試しながら使ってみましょう

アプリケーションのペースが速いシステムを情報システム部門が維持管理するとなったらどうしますか。例えば、「短期間での利用」、「できるかできないか試してみたい」といった要件において、複数

のインスタンス間で稼働するアプリケーションのバッチ起動を自動化し、クラウドインフラのスナップショットも定期的を取得したい、となった場合に「A-AUTO」のようなジョブ管理ツールを調達して使うことはないはずです。まず投資対効果が悪いですし、この場合、目的は短期に結果を出すことですから、そのために最低限の維持管理が提供できれば良いだけです。

少し前まではユニリタでも同じ課題と悩みが存在していました。お客様は、要件が発生したタイミングで簡単に自動化したいだけなのに、「A-AUTO」の試用契約などといった手続きが存在していました。つまり、必要な時に必要な機能を利用することができませんでした。しかし、現在はクラウド利用なども増加しペースの速いアプリケーションにおいても自動化要件の場面が増加しています。このような要件への対応を可能としたのが、50ジョブネットまでなら無料で、必要な時にいつでも簡単なインストールで使えるジョブ管理ツール「A-AUTO50」です。また、大量のインスタンスで連続性を保ったジョブ実行の制御を実現するOSSツール「GoCuto」もリリースしています。もちろん、どちらも無料で特別なアクティベーションも必要なく利用できます。すでにクラウドインフラの日常的な運用管理などで高い効果を発揮している事例も存在しています。

長年の運用で培ったノウハウやルールは今後も重要な資産です。それら資産のみに頼ることなく、少し新しい技術と融合しながら成長していくことで情報システム部門がイニシアティブをもって統制し、市場のビジネススピードへも追従していくことができます。この機会にユニリタの新しい技術から試してみたいはいかがでしょうか？

ユニリタでは、今後も最新技術を自らが試しながら情報システム部門の課題解決へ取り組んでいきます。効果を汎用化することで、お客様に活用いただけるサービスとして提供していきますので期待してお待ちください。

■ユニリタが提供するサービス

- A-AUTO50
50ジョブまでの小規模な業務に最適な無償版ジョブ管理ツール
- GoCuto
複数サーバ間のプロセス連携を手軽に実現するGo言語製OSS
- GoCutoジョブ自動化サービス
「GoCuto」+ジョブ管理ツールによるジョブ自動化サービス

セルフサービス化でITサービスの効率化を促進 ～ユーザ・サービスデスク担当者の良好な関係を構築～

既に「LMIS on cloud」を利用中でもっと効率化を図りたい方、リソースが限られているためセルフ化を促進できるサービスデスクツールを検討中の方に、今回は「LMIS on cloud」の最新バージョンで刷新された「セルフサービスポータル」を紹介します。

「セルフサービス」という言葉を聞くと、例えば飲食店では店員ではなく来店されたお客様自身がドリンク類を持ってくるというイメージを持たれるかと思えます。飲食店などにおける「セルフサービス」とはサービス提供者側はサービスを行わず、サービス利用者に行わせることにより、コストを削減し、サービス価格を下げることで価格競争力を強化することを主目的に置いています。

ITの世界においても「セルフサービス」は注目されていますが、セルフサービスを推進することはコスト削減だけに止まらず、さまざまな効果を得ることができます。今回はIT部門とユーザ間におけるセルフサービスの活用方法を紹介したいと思います。

ITにおける「セルフサービス」としては、「ヘルプの活用」が代表例としてあげられます。従来はIT部門のサービスデスク担当者が対応してきた業務やノウハウを、ユーザに公開しメニューとして提供することで、ユーザ自身が問題を解決できるようになります。これにより、サービスデスク担当者の負荷を軽減し、業務の効率化を図ることができます。また問合せに対する情報もナレッジとして蓄積でき、全社で集合知として活用することで、対応スピードと品質の改善を実現できるようになります。

■ユーザの悩み

- 「業務時間外に問題が発生!何とかしたいがサービスデスク担当者はもう帰宅している」
- 「問題が発生した時、どこに問合せしたらよいかわからない」
- 「問合せしたが、サービスデスク担当者から回答が来ない。急いでいるため、対応状況を確認したい」



■サービスデスク担当者の悩み

- 「複数のユーザから同じような問合せが毎日来ている」
- 「昔も同じような問合せが来ていたが、どのように対応していたか記録がなく1から対応している」
- 「問合せ状況が担当者でなければ把握できず、引き継ぎがうまくいかない」
- 「問合せが多すぎて管理しきれない」



ユーザ・サービスデスク
担当者相互の
悩みを解決

ユニリタの「LMIS on cloud」のセルフサービスポータルを活用すれば、
低コストでユーザ・サービスデスク担当者相互の悩みを解決することができます。

- ・いつでも問合せできる!
- ・対応状況がわかる!
- ・どこに問合せたらいいか、わかりやすい!
- ・FAQを見てすばやく自己解決できる!
- ・メンバが問合せた内容をチームで共有できる!



セルフサービス
ポータル

- ・FAQ公開で問合せ数削減!
- ・問合せの入力工数削減!
- ・問合せの対応結果を全社でナレッジとして共有!
- ・対応履歴が記録されているので途中からでも問合せを引き継げる!
- ・問合せ対応状況を管理者が把握できる!



ユーザ



サービスデスク

■ 問合せの確認

問合せの確認画面のスクリーンショット。検索結果として「INC-00001587:PC」の履歴が表示されています。

日時	内容
2016/11/15 21:00:28	PCの資産管理番号を数えてください。管理可能。2016/11/15 21:01:24 ユーザ追加完了します。
2016/11/15 20:55:48	HDDから異音がします。

下部には「問合せ状況が可視化」「対応履歴もあるので引き継ぎも簡単」というメリットが記載されています。

■ FAQ の検索

FAQ検索画面のスクリーンショット。検索結果一覧が表示されています。

件名	ユーザアクセス数
* 勤怠管理システムが正常に動いていません。	11
インターネットに接続できない	8
法定申告のお知らせ	7
勤怠システムが正常に動いません	2
社内システムのエラー発生	1

下部には「FAQを検索し自己解決!」「よく参照するFAQはブックマーク可能」というメリットが記載されています。



システム管理者の会は、システム管理者認定講座をはじめとする情報交換や交流の場を提供し、この趣旨に賛同いただける企業を「賛同企業」として広く募集をしています。今回は8月に賛同企業に加入いただいた、国際IT資産管理者協会（IAITAM）日本支部長 武内 烈氏へのインタビューをダイジェストで紹介いたします。

一 「賛同企業」に加入された動機を教えてください

近年は、ますますIT環境が複雑化しています。ユーザーズにこたえるべく、垂直統合型のサービスモデルで、迅速なIT環境が求められています。これは今までの「開発やSI主体のIT運用環境」ではなく、「運用者が中心となる再利用モデルのサービス環境」を指しており、システム管理者いわゆる運用チームが最も重要な存在となります。

そのような流れから、運用チームの方々が多く参加している「システム管理者の会」の重要性が高まると感じました。

国際的にも、IT資産管理への組織的な能力が運用チームにとって非常に求められています。IT資産管理者あるいはIT資産管理チームは、システム運用や管理という中で成熟度が求められるでしょう。そこに対してさまざまな支援ができると思い、「システム管理者の会」に賛同しました。

一 「システム管理者にIT資産管理の成熟度が求められる」とのことですが、具体的に教えてください

システム管理者の会は、認定講座でITILを教育しています。国際IT資産管理者協会では、IT資産管理のベストプラクティスであるIBPL（IAITAM Best Practice Library）を策定しており、これはITILと補完関係があり、整合性を保ったフレームワークです。

今後ますます変化が激しくなる仮想環境・IT環境において、構成管理の重要性はますます高くなっていきます。構成管理を実際に成功させようとする、欧米の過去10年位の経験から、「IT資産管理をきちんとしておかないと、構成管理がうまくいかない」ということが明らかになっています。今まさに、ITサービスマネジメントで構成管理の成熟度を上げていこうとしているところでは、「どのようにして構成管理を成功させるか」これはすなわち「IT資産管理をきちんとしておく」というポイントに直面している場面です。

システム管理者の会が提供する各種イベントで、欧米のグローバル組織におけるIT資産管理の取り組み情報を共有したり、当会が用意している「CSAM」というIBPLベースのソフトウェア資産管理者講習を提供したりできればと考えています。

一 システム管理者の会 会員に期待することは何ですか？

次世代のIT環境は、運用者が中心的な存在としてコントロールするものです。だから本当に頑張ってください。ぜひ頑張って、俊敏性の高いサービスを提供してください。



国際IT資産管理者協会
日本支部長
武内 烈氏

今号2ページで特集している『第34回 UNIRITA ユーザーシンポジウム』にて、マネジメントセッションの講師としてご講演いただきます。

紙面の都合上、抜粋したインタビュー掲載となっています。IT資産管理の必要性や詳しい内容、および今後の取り組みはポータルサイトにて紹介していきます。

★今回インタビューさせていただいた武内氏によるコラム「次世代IT環境の中心は運用チーム。急務となる『IT資産管理』とは？」が、システム管理者の会ポータルサイト内で連載スタートしました。こちらも、ぜひご覧ください。

● 詳しくは、「システム管理者の会ポータルサイト」をご覧ください。

システム管理者の会



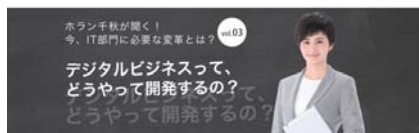
特設サイト更新情報

IT部門の変革をリードする特設サイト「it's YOUR turn!」 コラム第3弾掲載開始！今ならホラン千秋 壁紙プレゼント！

IT部門が「デジタル変革時代」に求められる役割とは？ITでビジネスが大きく変わる今、IT部門も変革が必要です。ホラン千秋スペシャルコンテンツでその理由や変革の方法を公開中！

It's New! デジタルビジネスって、どうやって開発するの？

コラム1ではなぜIT部門の出番なのか、コラム2ではIT部門の変革には、「運用レス」でリソースを確保することから始めて、新しいことに挑戦することをご紹介しました。今回のコラム3では、いよいよデジタルビジネスの開発を始めるためのポイントをご紹介します。キーワードは「Small Start」と「Quick Win」です。



壁紙
プレゼント

URL: www.unirita.co.jp/itsyourturn

関連ホワイト
ペーパー 公開中

業務を支えるITからビジネスを創生するITへ
～ Smart Formation Service とは～

特設ウェブサイトはこちらで検索

ユニリタ

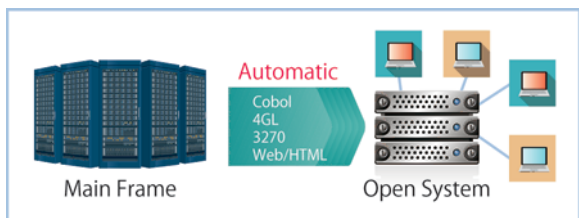


IT予算に占めるメインフレームコスト、データ連携のタイムラグ、災害対策、ハードの終息リスク問題を解消する「OpenFrame」によるオーダーメイド型リHOSTソリューション

当社(ティーマックスソフト)は、オープン環境のデータベース、ミドルウェア、フレームワーク、言語、OSまでを開発する基幹ミドルウェアベンダーです。独自の開発環境やツールが障害となって移行を断念してきたメインフレームユーザに、これらを含めたオーダーメイド型のリHOSTソリューション「OpenFrame」を提供しています。

レガシーマイグレーションを成功させる「リHOST」メインフレームは大きなリスク

メインフレーム、クライアントサーバ、Webへと企業の業務システムはパラダイムシフトを繰り返してきました。現在は量、質ともに過去を凌駕する変革の時代です。しかし、メインフレームを長年利用してきた多くの企業は、IT投資の多くを既存システムの維持管理に費やしています。



日本のメインフレームが抱える問題

日本のメインフレーム上の基幹システムは SoR + SoE

一般的にメインフレーム上の基幹システムは「Systems of Record」(SoR: 記録のためのシステム)と言われていますが、日本においては顧客との絆(Engagement)を重視し SoR と SoE の要素を持っています。個別要件への対応は基幹システム構築の当初から完成したのではなく、長年の工夫の結果として作りこまれたものです。故にメインフレーム上の基幹システムをERPへ置き換えるプロジェクトは難しく、スクラッチ開発には要件定義のために現行メインフレームシステムの処理内容の理解が必要です。

残されたメインフレーム

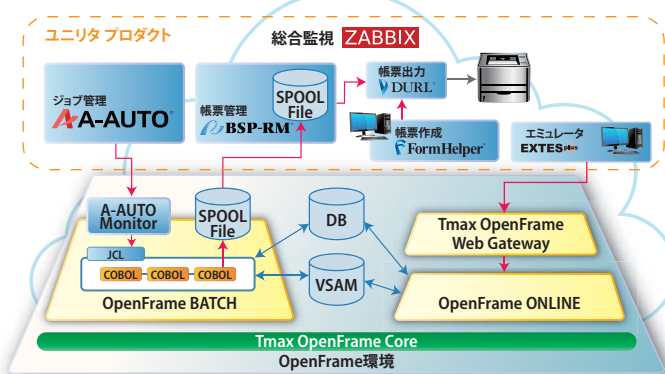
3度目のオープン化チャレンジ

メインフレーム全盛期の1980年代から利用してきたユーザは、西暦2000年問題の大規模改修が必要となった第一次オープン化検討、2007年問題によるメインフレーム技術者引退時の第二次検討の結果、メインフレームを継続利用してきました。このようなメインフレーム上の基幹業務は、塩漬けと呼ばれることもあります。顧客との絆を重視し SoR と SoE の要素を持っている業務に最適な完

成されたシステムともいえます。しかし、IT予算に占めるメインフレームのコスト、メインフレームとクライアントサーバのデータ連携のためのタイムラグ、災害対策コスト、メインフレームの終息リスクなどの問題は増大しており対策が迫られています。

オーダーメイド型のリHOSTソリューション 継続的な情報システム利用のための現実解

当社はオープン環境のデータベース、ミドルウェア、フレームワーク、言語、OSまでを開発する基幹ミドルウェアベンダーであり、リHOSTソリューション「OpenFrame」はその集合体です。設計当初から2バイトコードをサポートし、IBMのみならず、富士通、日立メインフレーム環境に対応してきました。プログラム言語についてもCOBOL、PL/I、アセンブラをサポート、階層型、ネットワーク型データベースもアプリケーションの変更を行うことなく移行が可能です。個別のユーザの環境、使い方に合わせてプロジェクトの中で「OpenFrame」をカスタマイズし移行を実現してきたオーダーメイド型のリHOSTソリューションです。対象のメインフレームは数十MIPSから数千MIPS、プログラム本数は数百本から数万本まで規模の大小に関わらず適用し成功させてきた実績があります。移行も数ヵ月から2年以内と短期間であることも特徴です。独自の開発環境やツールが障害となって移行を断念してきたユーザにとって、それらを含めて提供するオーダーメイド型のリHOSTは究極のソリューションと言えます。



TMAX リHOST

株式会社ユニリタ www.unirita.co.jp



本社	〒108-6029	東京都港区港南2-15-1 品川インターシティA棟	TEL 03-5463-6383
大阪事業所	〒541-0059	大阪市中央区博労町3-6-1 御堂筋エスジービル	TEL 06-6245-4595
名古屋事業所	〒451-0045	名古屋西区名駅3-9-37 合人社名駅3ビル(旧48KTビル)	TEL 052-561-6808
福岡事業所	〒812-0013	福岡市博多区博多駅東2-2-2 博多東ハニービル	TEL 092-437-3200

ユニリタグループ 株式会社アスペックス / 株式会社ビーティス / 株式会社データ総研
備実必(上海)軟件科技有限公司 / 株式会社ビーエスピーソリューションズ
株式会社ユニトランド

※ 本誌掲載の会社名、製品名は各社の登録商標または商標です。
※ 掲載されている内容については、改善などのため予告なく変更する場合がありますので、ご了承ください。